

によつて威を振つてトカラなる名は只だ其地方の名として存したにすぎない様に思ふ、此頃尙ほこゝにインンドゲルマーネン族が居て、然もずつと以前から佛教が旺盛を極めて所謂小王舍城の名迄殘して居るバルク地方に、漸やく此頃譯經が行はれたとはうけとりにくく、則ちトカラの經といふものを月氏の經として一向差支ないとと思ふ、かく定めた以上更に月氏にはいつの頃から譯經の事業が行はれたかといふ間に對しては、自分は何等の答をもたない（ミユーラー氏などは經が月氏に傳はるとすぐ翻譯されたと考がへて居る様である）しかしながら迦膩色迦王から二代目もしくは三代目の、Vasu Deva Hの貨幣には一種の Brahmi 文字でその名が記されて居るといふ事實と、中亞發見のトカラの經なる者が所謂 slanting brahni でかゝれてあることへを思ひ合はすと、此王の時代に此字を用ゐて經を譯して居たと見る傍證となりはせぬかと思ふ、ともかく贊寧の記する處は臆説ではない。以上はインンドゲルマーネンなる月氏に譯經があつたことをのべたのであるが、英の Stein や獨逸の遠征隊の得た結果によると、此外にもソグド (Sogd) 及び古いトルコの言葉と定められる佛典の斷片が見出されて居る。Müller 氏などは此ソグドなる名を以て支那にいふ康居、康國をさすものとして居るのである、(Beitrage zur genaueren Bestimmung der unbekannten Sprachen Mittelasiens) 今一々茲に之をのべるのは煩らはしいばかりであるから、すべて省略する、此の如く支那に來たといふ月氏、康居、西域の諸國などには既にそれそれ其國の言葉に翻譯せられた佛典があつた、そうしてかかる事實はたゞに佛教について認め得るばかりでなく、摩尼教がはいれば直ちに其經典が譯せられて居るし、ネストリウス派の基督教が傳へられるところもまた聖典が譯せられてある様なわけである。

そこで更にすゝんで漢譯の經のことについて考がへねばならぬ、以上述べた次第であるから西方諸國の人々が支那